

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成24年5月1日現在

機関番号：11301

研究種目：若手研究（B）

研究期間：2009～2011

課題番号：21730489

研究課題名（和文） アルゼンチン日系人の文化変容

研究課題名（英文） Acculturation of the Japanese in Argentina

研究代表者

辻本 昌弘（TSUJIMOTO MASAHIRO）

東北大学・大学院文学研究科・准教授

研究者番号：90347972

研究成果の概要（和文）：アルゼンチン日系人の文化変容について解明するために、アルゼンチンにおいてフィールド調査を実施した。具体的な研究事項は以下の三点である。第一に、第二次世界大戦以前に生まれた日系二世の生活と体験を明らかにした。第二に、日系人の生活史に関する詳細な基礎資料を整備した。第三に、アルゼンチン日系人が活発に活用してきた助け合いの慣習である講集団の有効性について、理論と実証の両面から検討した。

研究成果の概要（英文）：The aim of this research is to examine the acculturation of the Japanese in Argentina. I conducted field research in Argentina, and examined the following three issues. Firstly, we elucidated the life and experiences of the second generation Japanese who were born before the Second World War. Secondly, I collected the in-depth life-history data of the Japanese. Finally, I examined the effectiveness of traditional mutual aid associations (rotating savings and credit association) of the Japanese.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2009年度	1,100,000	330,000	1,430,000
2010年度	900,000	270,000	1,170,000
2011年度	900,000	270,000	1,170,000
年度			
年度			
総計	2,900,000	870,000	3,770,000

研究分野：社会科学

科研費の分科・細目：心理学・社会心理学

キーワード：アルゼンチン・文化変容・生活史・社会的交換

1. 研究開始当初の背景

研究代表者は、1994年から南米各地で日系

人（日本から移住した移民とその子孫）の調査を行い、特にアルゼンチンの日系人について

て研究を深めてきた。優れた地域研究を生み出すには、同一地域での調査を長期的かつ定期的に繰り返すことが欠かせないことから本研究を立案・開始した。

調査地アルゼンチンの概要は以下のとおりである。アルゼンチンにはヨーロッパからの移民が大量に流入した歴史がある。ヨーロッパからの移民に比べれば人数は少ないものの、日本からアルゼンチンへの移住も20世紀初頭から本格化し戦後まで続いた。

徒手空拳で海を渡った日本人移民たちは、都市部でのクリーニング店、都市近郊での花や野菜の栽培に活路をみだし、社会上昇を果たしてきた。

現在のアルゼンチンには3万人以上の日系人がいるといわれる。アルゼンチン各地に日系人が暮らしているが、本研究では首都ブエノスアイレスとその近郊に暮らす日系人を対象とすることにした。

2. 研究の目的

研究の目的は、アルゼンチンにおいて日系人を対象とした調査を実施し、社会心理学の立場から日系人の文化変容を明らかにすることである。具体的な研究事項としたのは以下の三点である。

(1) 戦前生まれの日系二世(移住した日本人の子弟)の生活と体験を明らかにする。戦前生まれの日系二世は、すでに高齢となっている。その研究記録を残すことが現在の急務になっている。

(2) 日系人の生活史に関する詳細な資料を収集する。日系人研究では、個人の出生から現在にいたる詳細な生活史が基礎資料として不可欠である。

(3) 日系人の協力行動を、講集団を対象として検討する。講集団とは参加者が金銭を交換して助け合いを行う慣習である。異郷の

地で直面した困難をのり越えるために、移民がどのように講集団を活用してきたのか明らかにする。

以上の三つの研究事項それぞれをつうじて、日系人と非日系人の民族間関係、一世から二世への世代移行、日系人の集合行動といった文化変容の諸側面を明らかにすることを目指した。

3. 研究の方法

(1) 戦前生まれの日系二世を対象としたインタビュー調査をアルゼンチンにおいて実施した。

2009年は、複数名の戦前生まれの二世にインタビューを実施した。

2010年は、インタビュー対象者の追跡調査を行った。あわせて、現地の日系人の協力をえて、スペイン語でインタビューに回答した対象者の逐語録を作成した。

2011年は、補足資料を収集するとともに、インタビュー結果の分析・解釈を現地の日系人と協働して行った。これは部外者である調査者と現地の人々が対等の立場で対話を交わしながら、学術的に価値がありなおかつ現地の人々にも貢献可能性のある結果を生み出すことを試みたものである。

(2) 日系人の生活史を詳細に聞き取るインテンシブなインタビュー調査をアルゼンチンにおいて実施した。

2009年と2010年は、生活史の詳細な聞き取りに協力してくれる対象者を探したうえで、インタビュー調査により生活史の概要を確認した。

2011年は、前年の聞き取り結果を整理したうえで、生活史資料の深さと厚みを増すために追加のインタビューを行った。また、インタビュー結果を補足するための文書資料を収集した。

(3) 研究期間全体をつうじて、理論と実証の両面から講集団に関する分析を実施した。

まず、理論的な側面から講集団の分析を深化させ、進化シミュレーションを講集団に応用する共同研究を実施した。

また、2010年に、二世・三世を中心にして行われている講集団の事例研究をアルゼンチンにおいて実施した。

(4) 日本国内の研究施設(国会図書館など)において、アルゼンチン日系人が刊行してきた日本語新聞や調査対象者が執筆した文書など、研究に関連する文書資料を収集した。

4. 研究成果

(1) 戦前生まれの日系二世に関する資料を記述的に整理し、二十世紀前半の日系人の生活と体験を明らかにした。その概要は以下のとおりである(辻本 & Kuda, 2010)。

① 一世である親が農業を営んでいた場合には、生育過程で居住地を転々とした二世がいる。

② 二世の学歴については、高等教育を受けている場合が多いが、初期の二世には十分な教育を受けるのが困難な場合があった。

③ 日系人は非日系人とも交際があり、アルゼンチン社会から排斥されていない。ただしヨーロッパ系が人口の大多数を占める環境のなかで、アジア系の風貌で生きることについて語る二世も一部にいた。

④ 日系人は、アルゼンチン社会で肯定的に評価されているといわれる。ただし、この肯定的評価は時期や状況により複雑な意味をもちうる。

今後は、以上の記述的な整理結果に対して理論的分析を行う作業が必要になる。

(2) 日系人の生活史に関する詳細な基礎資料を整備した。この基礎資料は三つからな

る。

第一に、対象者の出生から現在にいたる詳細なライフ・コースの記録(日本での生活、移住の経緯、異郷での生活など)である。

第二に、対象者を取りまく親族やコミュニティの動態に関する記録(家族・親族の状況、出身地から生じた連鎖移住、アルゼンチン日系社会の変化など)である。

第三に、移民を送出した日本と移民を受け入れたアルゼンチンの時代史に関する資料である。

現時点までに膨大な基礎資料の整備がほぼ完了したので、今後は、微視的水準(個人のライフ・コース)と巨視的水準(社会的・時代的な状況性)とを往還する分析を社会心理学的観点から行うことが必要となる。

(3) 理論と実証の両面から講集団を分析した。

社会心理学理論の立場からみると、講集団には社会的ジレンマの側面があり、非協力者(フリー・ライダー)の発生を抑制するメカニズムを明らかにすることが必要となる。

従来の研究では、面識関係による参加者選抜(peer selection)が講集団における非協力発生を抑制するとされてきた。本研究では、進化シミュレーションを講集団に応用する共同研究を行い、参加者選抜に加えて特定の制度的仕組みが必要であることを明らかにした(Koike, Nakamaru & Tsujimoto, 2010)。

また、アルゼンチン日系人は講集団を活発に行ってきたが、これまで、日系二世・三世が行っている講集団については研究がなされていなかった。本研究では二世や三世が中心となって組織している講集団の特徴(参加者・仕組み・活用目的等)を調べ、日本から持ち込まれた講集団という慣習が、一世のみならず、二世・三世の世代にまで特徴を変えながら伝承されていることを明らかにした。

さらに、以上の結果をアルゼンチン日系社会の歴史的な脈に位置づけ、アルゼンチン日系人の講集団にみられる有効性と弊害、協力行動の発生メカニズムについて総括を行った(Tsujimoto, 2012)。

今後は、講集団の研究から得られた知見を幅広い理論的文脈に位置づけ、一般化を図ることが必要となる。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計1件)

(1) Koike, S., Nakamaru, M. & Tsujimoto, M. (2010). Evolution of cooperation in rotating indivisible goods game. *Journal of Theoretical Biology*, 264, 143-153. 査読有

[学会発表] (計3件)

(1) 辻本昌弘・Alejandro Kuda, アルゼンチン日系人の生活史, 東北心理学会第64回大会, 2010年9月12日, 宮城学院女子大学.

(2) 辻本昌弘, 南米日系人の講集団にみる危機対処, 日本社会心理学会第50回大会 日本グループ・ダイナミックス学会第56回大会 合同大会ワークショップ, 「安全・安心」の社会哲学, 2009年10月12日, 大阪大学.

(3) 辻本昌弘, 地域研究の視点から, 日本社会心理学会第50回大会記念シンポジウム, 新たな社会心理学の展開と現状からの脱却, 2009年10月11日, 大阪大学.

[図書] (計1件)

(1) Tsujimoto, M. (2012). Migration,

economic adaptation and mutual cooperation: Japanese rotating savings and credit associations in Argentina. In N. Yoshihara (ed.) *Global Migration and Ethnic Communities: Studies of Asia and South America* (pp.163-175). Trans Pacific Press.

6. 研究組織

(1) 研究代表者

辻本 昌弘 (TSUJIMOTO MASAHIRO)
東北大学・大学院文学研究科・准教授

研究者番号 : 90347972

(2) 研究分担者

()

研究者番号 :

(3) 連携研究者

()

研究者番号 :